

立命電友会

濱川圭弘先生のご逝去にさいして

立命館大学理工学部特任教授
高倉 秀行



学校法人立命館元副総長であられ、理工学部光工学科教授をお勤めになられた濱川圭弘先生は、病氣療養中のところ平成28年12月19日にご逝去されました。享年85歳でありました。兵庫県川西市のモリアルホール川西池田飛翔殿にて、12月19日にお通夜、同20日に告別式が執り行われました。ご子息の濱川聡氏が喪主を務められました。

濱川圭弘先生は、昭和7年7月に京都市でお生まれになり、昭和31年3月立命館大学理工学部を卒業。その後大阪大学大学院に進学され、同博士課程を経て、昭和33

年10月に大阪大学工学部文部教官助手に任官されました。さらに、同学部講師、同大学基礎工学部助教を経て、昭和51年1月に大阪大学基礎工学部教授に就任され、平成8年3月に大阪大学を定年にて退官されるまで、38年の長きにわたり、電気工学の教育・研究に努め、平成8年4月に大阪大学名誉教授の称号を授与された。

その後、平成8年4月から平成15年3月まで立命館大学理工学部教授、平成10年4月に学校法人立命館副総長・立命館大学副学長に就任、平成15年4月から平成19年3月まで立命館大学総長顧問を務められた。この間、理工系における研究の高度化を成し遂げるため、ハイテクリサーチプロジェクトや、学術フロンティア研究プロジェクト獲得につながられた。さらに、図書館機能と情報通信基盤を融合した総合情報センターのセンター長としてもご尽力された。

同人は理工学の教育・研究において、アモルファス半導体が電子材料として実用化されるに至ったキーテクノロジーといえる価電子制御とそのデバイス物性の解明に先駆的な貢献をされた世界的権威者である。特にアモルファスシリコン (a-Si) ならびにアモルファスシリコンカーバイド (a-SiC) の製法とその価電子制御をめぐる一連の研究業績は、ランダム系の物理学誕生の端緒となった。また、同人による a-SiC の開発が契機となって、各種微結晶半導体が相次いで誕生し、ナノクリスタル (nc) 半導体時代の幕開けに大きく貢献された。同人は新素材としてのアモルファス半導体の基礎物性分野での数多くの先駆的な研究業績に加えて、その技術応用においても常に指導的立場に立って際立った多くの成果を残され、平成7年4月、紫綬褒章 (アモルファスシリコンカーバイドとその応用デバイスの開発への貢献) の栄に浴された。

同人は、世界レベルでの太陽光発電技術分野の普及発展にも大きく貢献され、国家プロジェクトへの貢献も特筆すべきものがある。同人は、昭和49年に発足した工業

技術院のサンシャインプロジェクトの発足に尽力した一人である。当初、太陽エネルギー有効活用は太陽熱利用ならびに太陽熱発電であったが、太陽光発電技術は、100分の1から500分の1の太陽電池コストダウンが必要で、太陽光発電により地上に必要なエネルギーを確保することは実現不可能と考えられていた。しかしながら同人は、昭和48年の第一次石油危機以前より太陽光発電技術の、エネルギー面のみならず環境技術面としての重要性も認識されており、サンシャインプロジェクトに太陽光発電技術を取り上げるため、通商産業省、資源エネルギー庁、工業技術院をはじめとする「官」と太陽光発電技術開発を実行する産業界(産)との間の調整役に奔走された。その結果、太陽光発電技術分野で、我が国は早くから世界のトップランナーとしての位置を強固にすることができた。

トップを走るがゆえの技術開発の困難や、出口がなかなか見えてこないことに対する焦りが常にある中、同人は、広人的ネットワークと、各種委員会組織を活用し、その進むべき方向を指導するとともに、新たな指導者、技術者の育成、国際規格の制定にも常に高い意識を持って活動された。21世紀に入り我が国が、世界の太陽光発電をリードすることができたことの多くの部分は、このような同人の尽力が結実したものとについても過言ではない。

立命館大学教授就任後も、引き続き太陽光発電技術の高度化並びに世界的規模での普及に精力的に活躍された。米国エネルギー省をはじめ、世界中の太陽光発電技術者との連携を常に意識し、国際会議における国際諮問委員を長年にわたって務めるなど、太陽光発電技術の高度化・普及に精力的に活動された。その業績は、平成8年の IEED William Cherry Award や、平成17年の Karl Boer Solar Energy Medal of Merit を始めとする数々の受賞歴が示すとおりである。

以上のように、同人は、教育者として多数の優秀な人材を育成し、豊富な学識経験と公正な見識をもって大学の運営と学会の指導に尽くし、大阪大学・立命館大学のみなならず学界・産業界に多大の貢献を果たしてきた。また研究者として、電気・電子工学並びに材料科学の広い分野で先導的な役割を果たし、多数の顕著な業績を挙げ、特に太陽光発電技術のエネルギー分野、地球環境保全の分野にも顕著な業績を残され、太陽光発電分野の発展に生涯の大半を尽くされた。その功績は平成23年の瑞宝中綬章、平成27年の文化功労者の受賞として顕彰されている。

平成29年2月に、大阪府吹田市において、「濱川圭弘先生を偲ぶ会」を催し、日ごろ先生にお世話になった関係者約300人と共に、先生の業績とお人柄を偲びご冥福を祈った。

目次

- P1 …… 巻頭言
- P2 …… 新学部長のご挨拶
- P3 …… 卒業生からの投稿
- P4 …… 在学生からの投稿
- P5 …… 進学・就職状況
- P6・7 …… 退職者のご挨拶
- P7・8 …… 同窓会便り
- P8後半 …… 学系便り、計報、事務局便り、連絡先

新学科長のご挨拶

電気電子工学科 教授 荒木 努

このたび2017年度の電気電子工学科 学科長を務めさせて頂くことになりました。

私をはじめ本学びわこ・くさつキャンパス（BKIC）を訪れたのは1998年4月です。当時、理工学部光工学科の名西徳之教授の光電子物性デバイス研究室に二号助手として着任しました。本学での務めも今年でちょうど20年目に突入します。この間の立命館大学、BKIC、草津市周辺の変化は大変大きく、あらためて20年という月日の重みを感じています。

私は大阪府立大学で博士学位を取得しましたが、専攻は金属工学専攻でした。しかし、所属した研究室は半導体、誘電体、超伝導体など金属以外の機能電子材料を扱う研究室で、そこで透過電子顕微鏡（TEM）の評価技術を取得しました。博士学位取得後、アメリカのアリゾナ州立大学、パデュー大学でポスドクを経験しましたが、いずれも研究内容はTEMに関するものでした。その後、立命館大学にお世話になることになりましたが、このときもTEMができるということでお声をかけて頂きました。TEMという一つの技術を有したことで様々なご縁を頂き、長くこの分野で仕事を続けてこら

れたことから、あらためて自分の強みを学生時代に形成することが大事な時代ではないかと感じています。

現在、電気電子工学科には21の研究室があります。無線通信、LED、バイオセンサー、パワーエレクトロニクス、光通信、情報ネットワーク、ディスプレイ、GPS、太陽電池、自動運転などなど、電気・電子・光・情報・生体・環境などの分野が融合した多岐に渡る分野の研究が進められています。これは電気電子工学の分野が今の世の中を大きく支えている根幹であることも表しているはずですが、しかしながら近年は本学に限らず、この大学でも電気電子工学分野の受験人気は低落傾向にあります。スマートフォンに代表される高度な電子機器が当たり前のようになり、その回りに存在し、それらを支える電気電子工学のありがたみが薄れてしまっているのでしょうか、大手関連企業の不振の状況が影響しているのでしょうか。いずれにせよ、大変厳しい時代となっております。

私の研究分野は窒化物半導体の材料開発です。2014年にノーベル賞を受賞された青色LEDに用いられている材料です。受賞者

の一人の天野先生（名古屋大学）が講演会でよく紹介されているお話しに、バッテリーで駆動可能なLED照明によって、モンゴルで遊牧生活をしている子供たちが夜、勉強したり本を読んだりするための明かりを提供することができたという例があります。大変便利になった今の世の中でも、世界中にはまだまだ電気電子工学の発展による恩恵を待ち望んでいる人が多

新学科長のご挨拶

電子情報工学科 教授 泉 知論

今年度の電子情報工学科長を拝命いたしました泉でございます。

私は2005年に当学科の前身である理工学部電子情報デザイン学科に着任し、今年で13年目になります。当時二回生となった一期生の専門の講義を担当することとなり、着任早々で勝手がわからず手探りで授業をすすめていたのを思い出します。授業前夜に徹夜で資料作成、早朝にローム記念館の回転機で印刷、の自転車操業で、学生のみなさんの反応を頂きながら一緒に授業を作っておりました。

特にLSIに関する教育研究に重点を置いた電子情報デザイン学科の教員配置とカリキュラムは産業界の注目を集め、半導体業界を中心に多くの卒業生を輩出しました。2012年の学系改革では、

くいること、そして将来の社会において、環境・エネルギー・安全に関する課題を解決し、幾世代にも渡るサステイナブルな社会実現には電気電子工学分野の貢献が必要とされていることを、ぜひ本学科で学ぶ学生達には伝えていきたいと考えています。今後とも御指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

准教授に昇任され、吉川雅弥先生、谷口一徹先生、佐保賢志先生がそれぞれ名城大学、大阪大学、富山県立大学にご栄転されました。若手といえば、私と立命館入学？が同期の電子情報デザイン二期生の田中美美先生が現在は教員として当学科で活躍しておられます。情報理工学部から来られた孟林先生と立命出身の二人が熱心に後輩をサポートしてくださっています。今年度は、教授准教授12名、助教特任助教2名の体制で、学科の運営にあたって参ります。

学科名称を電子情報工学科に変更し、激動する産業界の情勢に柔軟に対応できるよう電子情報通信に関するテーマをバランスよく配したカリキュラムに改定しました。その中でロボットプログラミングや電子工作など学生が創造力を発揮する低回生向けの演習も創設しました。

教員組織としては、電子情報デザイン学科創設メンバーである山田喬彦先生、寺井秀一先生、山内寛紀先生が定年を迎えられました。現在、山田先生、寺井先生は非常勤講師として、山内先生は特任教授として、引き続き学科の教学にご支援を頂いております。若手先生の活躍も顕著で、福水洋平先生、熊木武志先生がそれぞれ本学電気電子工学科准教授、当学科

我々が最初に卒業生を輩出してから10年目になります。この間、リクルータとして、あるいはキャリアに関する先輩講師として、たくさん卒業生にお越しを頂いております。共同研究の相手先のメンバーになっていて驚くこともありましたし、はたまた結婚報告などもありました。卒業生のみならずの近況・ご発展の様子を伺うととても嬉しく、また先輩から後輩へのご助言・激励をとて有り難く思っております。本稿をご覧になった方も機会がございましたら是非大学にお越しください。

ずっとお世話になってきた当学科にて今年度学科長として貢献させて頂きますこと、光栄に存じます。立命電友会の皆様のご支援、ご指導を頂きつつ、学科学系をさらに盛り上げていく所存です。どうぞよろしくお願いたします。

立命館大学30回生

学校法人立命館 人事部人事課付
立命館大学教職員組合(在籍専従) 副委員長

森岡 泰雄(1994年院修了)

私は、1988(昭和63)年4月に立命館大学理工学部電気工学科に昭和最後の入学をしました。卒業後大学院博士課程前期課程に進学し、修了後そのまま大学職員となり、今年2017年4月で大学院入学から数えて30年目に入り、大学30回生と言えないこともないかと思ひ表題にしてみました。

1988年は国際関係学部が開設された年であり、入学式も卒業式も総代挨拶は国際関係学部の方だったと記憶しています。また、前年の情報工学科の開設もあり、新4号館(現、洋洋館)が新築供用開始され、真新しい基本棟で学ばせて頂く恩恵も受けました。科目により他の建物も使うことはあつたのでその違いは歴然でした。

2回生までは実家のある大阪府八尾市東部の奈良県境と近い所(最寄駅は近鉄信貴線服部川)から衣笠キャンパスまで通学しており、通学時間に往復5時間半を要していたので1時限目の講義では睡魔との戦いでした。教職科目も受講していたので、当時の受講登録制限単位である年間60単位を超えての受講登録があり、学生実験も本格的になる3回生からは下宿

をしましたので時間的余裕がかなり出来ました。おかげで大学4年間の総取得単位数は271単位となり、4単位の科目が大多数だった当時に初めて成績証明書が2枚に亘った学生として知られることになりました。因みに下宿は東門から30m程のところでエアコンなしの四畳半一間、台所とトイレとシャワーは共用の家賃16,000円で、大学院博士課程前期課程の修了まで4年間お世話になりました。その下宿は現在もありませんが、さすがに窓は金属サッシに変わりましたがエアコンも完備されているようです。

4回生の卒業研究は溝尻勳先生の研究室に配属となり本格的な研究というものを初めて学びました。その頃は大学院が拡充される途上であり、毎年定員が5名ずつ増やされており、私の時は定員25名でした。溝尻研究室では推薦入試で定員に達していたため、一般入試組の3名は研究室を移ることとなり、1名が三木秀二郎先生の研究室に、私ともう1名が辻村寛先生と前田稔夫先生の研究室に配属となりました。

大学院の入学式はその年(19

92年)に完成したばかりの立命館大学国際平和ミュージアムを収容するアカデミア立命21の中野記念ホールで行われました。大学院では日常的に研究活動が中心となり、学部より高度な講義も受けなければなりません。洋書を使われ英語での講義もありました。また、その頃はティーチング・アシスタント(TA)制度が導入され始めた頃で、強電に関する学生実験のTAを担当させて頂き、配線チェックもせずに学生がスイッチを入れ、その瞬間に目の前で細い電線が短絡でプチ切れたり、被覆が焼け煙にまかれたりする経験もさせて頂きました。さて、1993年度は翌1994年4月のびわこ・くさつキャンパス(BKC)の開設に向けて移転作業や理工学部移転後の再整備の関係で実験は12月一杯で終了して研究室を明け渡し、修士論文や卒業論文をまとめるのは、2号館3階の大教室を間仕切り、卒研室ごとに割り当てられた小部屋での作業でした。無事に論文を提出した後は、最後にBKCでの荷解きを手伝いもしました。

とここで辻村・前田研究室では同窓会が毎年開催(現在は2年に1回以上、複数の卒研同窓会で合同開催)されており、M2回生が中心となり在籍する院生と卒研生で案内発送から準備をして当日の運営までをしていました。その経

験があつたからこそ、研究室の同窓会は勿論のこと立命電友会、大生全体の校友会での参加に繋がっているかと思ひます。大学院修了後は縁あつて1994年4月より学校法人立命館職員として採用され、財務部施設課(現管財課)に配属され、電気関係設備の保守管理業務の担当からスタートし、改修工事や新築工事の電気関係部分の担当、そのうち建築関係全般についても担当していくようになりました。この会報でもご紹介させて頂いたこともありましたが、1997年10月からの立命館アジア太平洋大学の建設事業では、大分県別府市十文字原の建設現場に3名の大学スタッフの1員として常駐し、特高受変電設備の工事計画届から当時の経産局による使用前検査も経験させて頂くことも出来ました。需要家の場合、特高設備の新設や更新は何度も経験できるものではないのですが、2011年2月に工事実施した衣笠キャンパスの特高設備更新ではスペースの限られた同じ特高電気室での長時間停電なし(系統切り替えの一時断2回と本線1予備線の停電自動切換試験2回)での機器更新工事を実施しました。その後、温室効果ガス削減など地球環境問題改善の取り組みが目されるようになるころには、省エネ対策などにも取り組み、立命館が取り入れている事例報告を文

部科学省などの研修会で報告する経験もさせて頂きました。大きな転機は2013年5月に訪れました。長期在籍者は必ず異動するとの人事方針ののっとり定期人事異動で社会連携部校友・父母課に異動し、校友会業務を担当することになりました。職員人生20年目にして初めての異動らしい異動で、転職したようなものでした。北は北海道、南は九州沖縄まで全国47都道府県すべてに卒業生である校友が在任しそれぞれ活躍され、海外にも多くの校友が活躍されています。都道府県、海外にはそれぞれ校友会があり、立命電友会の会員である先輩方の中にも都道府県校友会の役員を担っておられる方が多数いらっしゃいます。立命館大学の校友会は2019年に設立100周年を迎えますが、設立のきっかけは母校の大学昇格支援であり、母校支援、後輩支援は今も続いています。立命電友会もそれは同じであり、今後もっと拡充していかなければならないのではと思ひます。

最後になりましたが、現在私は人事部人事課付の在籍専従で2015年5月から立命館大学教職員組合の副委員長を務めています。教学課題の改善、労働環境の改善など多くの課題を解決して立命館大学がよりよくなるよう微力ながら尽力していきたいと考えています。

です。

大学での経験

杉山 凜平

(立命館大学大学院 博士課程前期課程)

大学生生活での経験

私は、2013年に理工学部電気電子工学科に入学をした。この学科に入学したのは、当時、これからの電子機器の発展には、機器を構成する電子素子の性能の進歩、発展が重要な要素であろうと思っており、電子素子の研究開発の専門知識を身につけるための勉強をしたからである。

学部在籍中は、ベクトル解析、微分方程式という大学レベルの数学の科目をはじめ、電磁気学、電子回路、信号処理という電子工学関係の専門科目を受講した。

最初の頃は苦労した。大学入学前まで持っていた「とりあえず答えが合っていれば良いや」と言う考えは1回生前期までに無残に砕け散った。定期試験、小テスト、レポートでは、講義の内容を理解した上で答えが正しいか、否か、だけしか求められていないことに気づいた。この出来事から、自分から学び理解するという姿勢を持つて勉強することが大事だと気付いた。

大学生生活は何も勉強だけをして生活をしていただけではなかった。サークル活動もしていたし、長期休暇の頃になれば、私は日本各地

に旅に出て行った。北は北海道、南は沖縄まで、セメスター期間に貯めた貯金は長期休暇中の旅の資金となった。世界遺産の名所や山海、遊園地など多くの場所に行き、同じ日本でも微妙に違う気風、建築様式、人柄、地域に根付いた文化を観て感じてきた。広島県に訪れた時、尾道市というドラマの撮影地で、猫が多く、坂が多い地域や、博多区でたまたま見つけた美味しいもつ鍋を食べたことも印象的であったが、広島原爆ドーム前で英語、中国語、フランス語などで書かれた手作りの原爆に関する資料が置いてあり、それと原爆がもたらした現実と歴史を言葉と身ぶりでも伝えるボランティアのおじさんが、多くの様々な国の観光客に説明している光景は今でも強く印象に残っている出来事である。社会科学の資料集では読むことが無かった事を、現場に行かないと知ることが出来なかった事を知った。やがて、3回生になり、その後期に研究室の配属の時期がやってきた。どの研究室を希望しようかと、とても悩んだ。自分がやりたい研究テーマ、魅力的な研究テーマだけを絞っても4つくらいあった。研究室見学した際に、先生方

先輩方から研究室の決め方について助言をもらった。先輩方からの助言は「本当にこの研究室でモータ関係の研究がしたかったから」、「この先生は優しいからこの研究室にした」やら、「ある研究室の先輩の目が死んでいたからこの研究室は止めた」など実に多様であった。先生方からも自分の学生時代の決め方を教えていただいた。しかしながら全員に共通していたのは「最後は勘で決めた」ということであった。

結局、自分の経験や周りの意見を交えて総合的に考え、候補を絞り、自分の勘で最終決定した。

研究室とドイツでの経験

最終決定した研究室は、無線通信を研究する研究室であった。担当教官はブラジル出身、ドイツ居住、日本語ペラペラ、国際的な経験が豊富なアブレウ先生である。

この研究室では「エネルギーハーヴェスティング」という技術を用いたネットワークの研究があり、これが私が取り組みたい研究テーマであった。この研究テーマは、「IoTの実現のために世界的に期待されている研究テーマの一つで、現在、私はネットワークを作るための最適な電力送信方針の理論解析を行っている。

担当教官が日本人では無いとい

うことで、この研究室は今の日本では珍しい性質を持っている。例えば国際的な視点や考え方を簡単に持つことができる環境である。何人もの留学生が数ヶ月単位で研究室に來たり、様々な国の会社の方、研究者が来客したりと、日本人以外の人との交流が多い研究室である。また、アブレウ先生がドイツ居住なのは、現地のインターナショナル大学でも教鞭を執っているからである。昨年の夏休み、アブレウ先生の指導のもと、ほかの研究室の学生も交えて、7人がそのドイツの大学へ短期留学をした。

ドイツの滞在期間は49日間であった。北海道より北緯に位置するブレーメンという街で生活をしたり。猛暑や豪雨などなく快適な環境下で活動をした。

具体的には、自分の研究テーマと似ているテーマを研究している現地学生と交流しながら研究を進めたり、ArduinoとSimulinkを扱えるようにレクチャーを受け、実際に自分でプログラムをして簡単な制御装置を作ったり、シミュレーションを行ったりした。

私たちは研究室活動の一環で留学をしていたので定期的に研究の進捗の発表の機会もあった。しかし私の研究は思うように上手く行かない事ばかりで、難しく、厳しかった。しかし、やりがいがあり、一つのことには没頭できる研究とい

うものに楽しさを感じていた。研究以外では、ミュンヘンに行きBMWの自動車工場見学や、大学構内で現地学生とバーベキューをしたり、ドイツビールを堪能したりと一般的な旅や留学では得難い経験を得られた。

語学面では、ドイツでの経験を通して、初めは難しかった英語も最後の方は簡単になった、ということは無く、むしろ滞在中に日々自分の英語力の無さを痛感させられていた。英語力の向上は、私の現在の課題の一つとなっている。

大学院生活とその先

大学生生活で多くの経験を得て、世界の広さと深さを知った。また、研究をし続けたいという夢ができた。2017年4月から大学院前期課程へ進学をすることになり、本格的に研究に勤しむ時期になった。大学院生活では、研究で結果を残して行くつもりである。私の研究が未来の生活に役立てるよう活かしたい。

そのために驕ることなく、時には過去の経験を生かし、直向きに研究に臨み、そして一層多くの経験をしながら、大学院生活を送ろうと思う。

2016(平成28)年度
電子システム系卒業生修了生進学・就職状況

2016年3月終了・卒業の大学院・学部生の進学・就職状況を表Iに示します。

大学院前期課程の修了者数は計116名、学部卒業生は239名です。後期課程への進学者は0名、学部卒業生のうち120名が大学院進学、大学院進学率は約50%です。(昨年度は43%、一昨年度は40%)

大学院修了生の約95%、就職を希望する学部卒業生の内の約69%(2017年2月14日現在)が就職先を決定しております。就職先一覧を表IIに示します。業種は例年通り電気・電子、機械が55%強を占めている他、自動車・情報システムなどの就職先が増えています。

景気の回復に伴い、メーカー系を中心として企業の採用意欲も活発化しており、かつ、あらゆる産業での電子化の進展に伴い、インフラ・建設や医療分野等の広範な分野での電子系学生のニーズが高まっています。

公式な採用活動日程は、経団連の指針に基づき、企業の説明会は3月開始、選考は6月開始でした。

I. 卒業生・進学者・就職者一覧

(2017年2月14日現在)

	卒業生	進学者	就職者	活動中 (内定あり含む)	その他
大学院(電気電子工学科)	79		75	1	3
大学院(電子情報工学科)	37		35	1	1
電気電子工学科	135	82	37	13	3
電子光情報工学科	8	2	3	3	
電子情報デザイン学科	4		1	3	
電子情報工学科	92	36	41	15	
合計	355	120	192	36	7

しかしながら、採用予定者の早期確保のために、実際には上記の日程よりも早く、OB訪問を活用した企業広報や、面談という形で選考が進んでおります。

したがって、3月の説明会前までに、自主的に企業研究や自己分析などの準備をしておくことが必要です。その意識づけの為に、キャリアセンターでは前年の12月に就活直前ガイダンスを開催して

います。また、最近の傾向として、以前より存在した夏のインターシップに加えて、3月の説明会解禁直前の1~2月に短期のインターシップを行う会社が出ており参加する学生も増えています。

一方で、6月の正式選考以降に、内々定辞退者が出たことに伴って、補充の採用活動を行う企業も数多くあるため、第1志望企業にて採用に至らなかった場合でも、粘り強く就職活動を継続することが必要です。

電子システム系でも、早い段階で、就職活動に対する意識づけを行うため、2回生以降の専門科目の中で、就職活動を終了した先輩や電子システム系出身のOBを招聘して、キャリア講演会を開催しております。先輩諸氏におかれましても、より一層のご支援をお願い申し上げます。

(就職委員 藤野毅)

II. 就職先一覧

(大学院・修了生の就職先も含む)(順不同、敬称略)

業種	企業名
電気電子機械	ローム、オムロン、三菱電機、パナソニック、きんでん、トーエネック、クボタ、日立造船、栗田工業、住友重機械工業、村田機械、川崎重工、ヤンマー、富士ゼロックス、鳥津製作所、村田製作所、住友電装、日本電産、日立製作所、富士通、日本電気、ソニー、パイオニア、東芝三菱電機産業システム、TDK、イビデン、ルネサスエレクトロニクス、デンソー、富士重工業、アイシン精機、アイシン・エイ・ダブリュ、浜松ホトニクス、リコー電子デバイス、ホシデン、GSユアサ、安川電機、竹中エンジニアリング、日立国際電気、ダイフク、ユタカ技研、東研サーモテック、宮川パネ工業、スギノマシン、SCREENホールディングス、大喜工業、ヒラノテクシード、ナベル、グローリー、タカラベルモント、大和製衡、吉田製作所、シーシーエス、日本テキサス・インスツルメンツ、シンフォニアテクノロジー、寺崎電気産業、パナソニックエクセルテクノロジー、イマック、ケーヒン、日本サイプレス、ダイトロン、宮地弘商略(61社/106名)
電力・ガス	関西電力、北海道電力、北陸電力、四国電力(4社/6名)
自動車	トヨタ自動車、本田技研工業、日産自動車、マツダ、スズキ、ヤマハ発動機、トヨタ車体、いすゞ自動車(8社/16名)
運輸・通信	東日本旅客鉄道、西日本旅客鉄道(2社/2名)
印刷	トッパン・フォームズ(1社/1名)
情報システム	NTTファシリティーズ、パナソニックESエンジニアリング、協和テクノロジーズ、エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ、NTTビジネスソリューションズ、エヌ・ティ・ティ・データ、富士ソフト、日立ソリューションズ、NECネットワークス、Sky、スミセイ情報システム、OKIソフトウェア、コーエーテクモゲームス、エヌ・ティ・ティ・データ関西、パナソニックデバイスシステムテクノ、トヨタメディアサービス、日商エレクトロニクス、CDS、PSP、エムオーテックス、フェンリル、日本アイ・ピー・エム・サービス(22社/23名)
その他	大林組、竹中工務店、千代田化工建設、ヤマハ、任天堂、パリオセキュア、十六銀行、愛知銀行、三井住友カード、メイテック、アルプス技研、オムロンソーシアルソリューションズ、近鉄グループホールディングス、サイマックス、エル・ティー・エス、ヴィッツ、フリーダム、JFEエンジニアリング、MHIニュークリアシステムズ・ソリューションエンジニアリング、ジェー・ピー・シー、日能研関西、WITS、おうみ教育社、ワールドインテック、エスユーエス、アーキ・ジャパン、セノン、国家公務員一般職、みよし広域連合、京都人事委員会、茨木市役所、名古屋市人事委員会(32社/38名)

退職にあたって

電気電子工学科
教授 齊藤 茂

本年3月をもって定年退職いたします。14年間、多くの方々にご指導をいただき、今日を迎えることができました。厚く御礼申し上げます。

私と立命館大学との関わりは、着任の3年ほど前、当時の電子光情報工学科のある先生からの電話に遡ります。先生は私の企業時代のある組織に所属しておりました。電話の内容は、学生実験の非常勤講師を探しており、先生が目星をつけている研究員に意向を聞いてほしいということでした。当人とその周りの何人かにあたってみましたが、皆都合がつかないとのことでした。後日、その旨回答いたしました。そのおり、先生が考えている人ではありませんが、ただ一人だけ対応できそうな人がいると伝えました。「誰ですか?」、「私です」というやりとりが続きました。

その結果、半年間だけでしたが、奈良から片道2時間をかけて通うことになりました。かなり難しい内容を扱っているというのが学生実験に対する印象です。学生との関わりは、私にとっても良い経験となりました。その後、教員の公募があり、それに応募して現在に至りました。

卒業論文、修士論文では、光

ファイバ通信技術とその応用に關するテーマを対象としました。光ファイバの分散や非線形屈折率のためにおこる信号ひずみとその改善策、パルス形状や変復調方式による伝送特性の相違、良好な伝送性能を実現するための方策などを検討するものです。特に、特性を支配する主な要因は何か、その要因と性能の関係を簡単な式で表わせないかということに留意しました。何か法則のようなものが見出されると、それまでのもやもやが晴れるようで、学生と一緒に楽しく楽しさを味わうことができました。

また、応用として、光ファイバセンサの検討もしました。光の干渉や散乱を利用して、光ファイバに加わる外乱を検出しようというものです。学生と一緒に実験系を用意したり、回路を作成したり、特性を測定するのは大変楽しいものでした。うまく動作すると、学生が自信を持つのがよくわかりました。

講義では、電気回路、通信工学、信号解析、学生実験などを担当しました。どうしたら分かり易く説明できるかということに頭を悩ませ、準備を行いました。それらが受講生にどれほど役立ったのかは定かではありませんが、私自身が理解を深めるのに有意義であったことは事実です。例えば、信号解析で習うような手法は、研究室でも用いており、連続的な時間信号や雑音、それらのスペクトルを離散的に計算するときの設定や解釈

に役立ちました。

学生の皆さんに触れてみて、その興味や志向するところ、講義や研究に対する取り組みなどは、かなり広範囲にわたっていると感じました。学科というくくりの中では、それらはもう少し単色かと思っていました。必ずしもそうではありません。良し悪しは別にして、これがこの学科の特徴なのかもしれません。

今後学生の皆さんが社会に出て、様々な分野で活躍することを期待しております。私自身は特別任用教員として今しばらく勤務させていただきます。よろしくお願いいたします。

退職にあたって

電子情報工学科
講師 谷口 一徹

2017年1月末をもちまして立命館大学を退職いたしました。立命電友会の皆様にはこれまで大変お世話になりました。2月からは母校でもある大阪大学大学院情報科学研究科で准教授として勤務しております。本稿を執筆している時点では新しい居室も大分片付き、新年度に向けて英気を養っているところです。

私は2009年4月に当時の電子情報デザイン学科に助教として着任いたしました。そして助教として5年、任期制講師として2年

10ヶ月の計7年10ヶ月間お世話になりました。私は学位を取得してすぐの着任で、大学教員として、そして社会人としての第一歩を伝統ある立命館大学で踏み出せたことを大変誇りに思っております。

着任当時は学生から教員という立場の違いに加え、出身の国立大学から私立大学という文化の違いにも大変戸惑ったことを覚えております。しかし、そんな戸惑いも一瞬で、組織の風通しの良さや大学の自由な雰囲気になじみになりました。また、元気の良い優秀な学生にも恵まれ、教員としても大変充実した時間を送る事ができました。着任当時は研究室の学生とも年齢が近く、よく南草津駅周辺でゼミ終わりに飲みに繰り出し、日付が変わるまで飲み明かしておりました。今でも大変良い思い出です。

加えて、着任当時、私は学系でも最年少であったためか、多くの先生方にも気さくに声をかけて頂き、研究のこと、大学運営のこと、学生指導のことなどをご指導頂きました。特に研究面では、学部や学科の垣根を越えて、全くの分野外だったスマートフォンアプリの開発プロジェクトにも参画する機会を頂き、自分の幅を大きく広げることができました。このように8年弱という在職期間ではありますが、大学教員としてのキャリアを積みつつ、ここまで充実した時間を過ごすことができたことは、立命館大学の構成員の皆様、そして立命電友会

の皆様との出会いが無ければ到底なしえなかったことと思います。このように充実した時間を過ごすことができた一方、私の大学教員としての意識を大きく変える出来事もありました。学内のところから先生から「一徹先生は古き良き助教だね」と言われたことです。自分は今までは「若手教員はこうあるべきだ」というテンプレートのようなものを無意識に持っており、それに縛られ何かに遠慮していたように思います。しかし、立命館大学では助教や任期制講師といった若手教員でも一人前の教員、そして一人前の研究者として扱ってくれます。これは大変嬉しいことではありますが、教員、そして研究者として成長する大きなチャンスでもあります。その先生の言葉は、目の前にある大きなチャンスに気付かせてくれると共に、自分の意識を大きく変えることができました。

新しい環境に慣れつつある一方、ふとした時に立命館大学を懐かしく思うことが良くあります。そんなとき、自分にとって立命館大学が第二の母校と言えるほど大きな存在である事に気付きます。所属は変わりましたが、立命館大学の応援団の1人として、諸先輩方に教えて頂いたことを胸にこれからも頑張っていこうと思っております。最後になりますが、立命電友会のみならず、ご発展と、会員の皆様のご健勝を祈念して退職にあたってのご挨拶とさせていただきます。

退職にあたって

電子情報工学科
助教 佐保賢志

2017年3月末日をもって退職し、4月より富山県立大学に着任致します。在職期間は僅か3年でしたが、多くの方々にご指導を賜り誠にありがとうございました。前職の京都大学とは全く異なる私立大学ということで不安な気持ち一杯でしたが、皆様の多大なご協力のおかげで、着任当初からスムーズに、かつ自由に教育研究をさせて頂きました。本当に感謝の言葉もございません。同時に今回の転職により、各所にご迷惑をおかけした事を深くお詫び申し上げます。しかしながら、本学では有期雇用の助教であり、赴任先では任期の定めが無く、かつ講師への就任となることから、何とかご理解頂ければと伏してお願ひ申し上げます。次第でございます。

研究に関しては、前職では近距離レダ計測の研究に従事していましたが、本学着任後はこれに加え、超音波・加速度センサ等の異種センサ融合による移動体計測の基礎研究テーマを独自に立ち上げました。また、馬杉先生のご研究にも関わらせて頂き、電磁波工学の研究者としての幅を広げることができました。最も重要と思われる経験は、国プロの機関代表者を3年間務めたことです。大きなプ

ロジェクトの運営は非常に大変で、独力では不可能であることを痛感しました。本学の素晴らしいところは、煩雑なプロジェクト管理を職員の皆様が積極的にご支援くださることです。おかげで何とか乗り切ることができました。以上の研究活動及びその充実した支援により、3年の在職期間中に15編の学術論文の採択、4件の学会・財団関係の受賞など、一定の業績を挙げる事が出来ました。

教育に関しては、講義・学生実験・卒研指導と一通り経験させて頂きました。驚いたのは本学のFD研修の質と量です。同研修が1日で終わる大学もある中、本学では2年間の研修を課せられました。教育学の基礎理論から、授業設計・シラバス執筆法といった実践的な内容まで濃密に学ばせて頂きました。講義においては、学生の多様性に苦勞しました。多分野の応用例を提示する、多様な難易度・方式の課題を選択的に実施させる等の工夫を凝らしましたが、有効な授業法は見出せておりません。ただ、この多様性こそが本学の良い所であると、主に卒研を通じて感じました。卒研を初めて直接指導した2名の学生は、1名はスポーツ推薦、もう1名は数学が得意な学生という組み合わせで、両君の発想や研究スタイルの違い、それによって産まれる相乗効果が明確でした。多様性の良さを垣間見ることができ、指導していても楽しかったです。

以上の通り皆様のご助力により、充実した3年間となりました。少しは皆様に恩返しができるようになったと思われるこのタイミングでの転職は非常に心苦しく、悔いが残っております。2017年度は本学の客員研究員を兼任致しますので、引続き少しもお役に立てればと強く願っております。末筆ではございますが、立命電友会の益々のご発展を祈念し、退職のご挨拶とさせて頂きます。

浦山研究室 同窓会

2月11日(土) 京都駅近くのホテル佐野屋で浦山研究室の同窓会を開催しました。幹事から昨年未の23日に緊急招集の連絡がメールで来てどうしたんだろーと思いつつ参加しました。前回の浦山研究室の40周年記念同窓会(平成27年4月25日開催)から二年弱過ぎでの開催になっていました。

当日はいつもどおりのメンバーが次々と開催場所のホテルロビーに入ると先生を囲んで話が始められていました。早速、宴席へと移動して浦山先生、前田先生をはじめ卒研生17名の参加の同窓会となった。今回は緊急招集であったこともあり前回よりも参加者が少なかった。まずは乾杯の音頭の後、卒業年順に自己紹介からスタートした。改めて

近況を含めた紹介となり、定年、再雇用、再就職、介護、健康管理、趣味、マラソンチャレンジなど可能性への挑戦を聞き同感、羨望、驚嘆と様々な思いを感じながら夫々のお顔を見て年輪を感じました。現役の身としてはまだまだこれからもっと頑張ろうという思いにさせられました。この集まりだからこそ感じられるひとときでした。

さて、自己紹介が終わると今回の同窓会の緊急開催の目的を浦山先生から切り出された。近年は辻村・前田研究室、浦山研究室の合同同窓会に川畑研究室の同窓会を加えて幅広い世代で同窓会を開催することとなり大変良いことですが、合同同窓会の会長を浦山研究室から輩出することになったこと、また六月に合同同窓会を予定していることを話された。そこで先生の推薦で、研究室一期生である巻田 茂(昭和51年卒)さんに合同同窓会会長をお願いし、御本人のご快諾と参加者一同の賛同により、心配された今回の目的も解決した。巻田さんは、今日も中国出張の帰路で多忙にもかかわらず引き受けて下さり浦山研究室同窓会として強力な支援を確認し合った。

その後は、各テーブルで鍋を囲みながら、先の自己紹介の話が広がっている様子でした。また、いつも前田先生がプロのカメラマンとして写真を撮ってくださっています。今回も前回の同窓会で撮った写真を各テーブルまで来て各位に手渡しされていた。これに

はいつもながら感謝する次第です。そうこうする間に次々と運ばれてきた料理も終わり、2時間があっという間に過ぎ、恩師のお元氣なお顔を拝見し変わらぬ様子に安堵し再会できた同窓会の諸先輩から元氣を頂き、また親交を深める貴重な時間を酒を酌み交わしながら過ごせたことに心身に満足できました。

最後には、いつものどおりのフアインナルセレモニーである集合写真を前田先生をお願いすることでクライマックスを迎え一枚の写真に、いつも小さなハプニングあり、笑いありで再会を誓ってチーズして散会となった。

最後に今回の同窓会開催にあたり大変お世話になった幹事さん、また立命電友会事務局の皆様にご挨拶申し上げます。

(中土 誠 記)



川畑研究室 同窓会

昨年(平成28年)10月15日(土)に、川畑隆夫・良尚研究室の同窓会総会・懇親会を開催しました。

川畑研究室は、川畑隆夫教授により1993(平成5)年に発足してから現在で23年が経過しておりますが、今までに同窓会等を開催したことがなく、また途中の2004(平成16)年には川畑隆夫教授から川畑良尚教授へ引き継がれた事もあり、各世代間の繋がりが非常に乏しい状態でした。そのような中、一昨年10月に合同での開催をお声かけ頂きました「辻村・前田研、浦山研、川畑研合同同窓会」において、川畑研究室としても各年代の同窓生及び現役生間の交流をもっと活発にすべく同窓会を開催しよう、という計画が持ち上がりました。私を含めそこに参加したメンバーが幹事となり、数々の打ち合わせを経て昨春秋、川畑研究室として初めての総会・同窓会を正式に開催する運びとなりました。

同窓会当日は現役生9名を含む28名にご参加頂きました。まず始めに「びわこくさつキャンパス(BKC)」にて、川畑研究室同窓会総会を開催し、今回は第1回目という事で同窓会の正式発足を宣言すると共に、同窓会幹事について



体制の承認を行いました。その後、現在の研究室の様子に参加された同窓生に見学頂きました。現在の川畑研究室は実験棟「エクセル1」の1Fですが、私の在籍していたBKC移転当時は「ウエストウイング」の2Fにありました。そこはモータ等の実験をするに適した場所とは言えず、実験室にとどまらずフロア全体にモータから発せられる振動がよく感じられたものでした。現在は、その当時から比べると機材が充実しており随分環境が整ったなと思いました。総会・研究室見学の後は、「南郷二葉屋」に移動して同窓会(懇親会)を開催しました。ご多忙な中、来賓として笠原学部長・高山元立命電友会事務局長にご出席頂き、同窓会開催に関する祝いのお言葉を頂きました。川畑隆夫先生はご健康な様子で、川畑良尚教授も研究室を引き継いで頑張っているらしいです。



また、参加者の内の数名には、スライド等を用いて近況をプレゼンして頂きました。川畑研究室の主要研究テーマであるパワーエレクタロニクス分野へ進んでいる者や、それ以外の分野に進まれている者など、それぞれが研究室で学んだ経験を活かして活躍されているらしいです。そしてプレゼンされた方以外も自己紹介と一言近況を報告して頂き、全員で共有いたしました。しばらくの歓談のち、最後に全員で記念撮影を行うってこの日は解散となりました。今後は年一回の開催を行う予定ですが、今回の参加人数を踏まえると、まだまだ同窓生や現役生との交流を活発にする努力がまだまだ足りないかと、強く感じております。

最後に、今回同窓会に参加できなかった方々も、次回開催の折には是非とも同窓会に参加頂き、人とのつながりを新しく掴み、交流を深め広げて頂ければ幸いです。
(威徳井 浩 記)

卒年	氏名	氏名
昭15年	岩崎 博	平成27年2月24日
昭24年	大沼 丈夫	平成28年3月3日
昭26年	稲岡 武	
昭31年	西川 隆士	
昭31年	井狩 秀夫	平成28年11月13日
昭33年	溝口 正昭	平成28年9月8日
昭34年	上野 実	
昭40年	富岡 保雄	平成28年7月9日
昭40年	田川 彌八郎	平成28年2月19日
昭40年	石田 洋徹	平成28年1月

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

学系便り

平成29年度
電子システム系の主な役職者
電気電子工学科
学科学長 荒木 努
就職委員 瀧口浩一
電子情報工学科
◎学科学長 泉 知論
就職委員 藤野 毅
◎は学系長です

事務局便り



立命電友会会報48号の発行にあたり、ご寄稿頂きました皆様に対し心よりお礼を申し上げます。春の訪れとともに今年も多くの学生が卒業式・修了式を迎えました。大いなる可能性に向かい夢ある未来を歩んで行かれることを心よりお祈りいたします。
住所及びアドレスの変更がございましたら事務局までご連絡頂きますようお願い致します。
WEBからも変更受付が出来ますのでご利用ください。(上田)

立命電友会連絡先
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部電子システム系内
立命電友会事務局 川畑良尚
上田美津子(月木)
電話・0777(561)2662
FAX・077(561)2663
E-mail: den-yu@srtsu.meiji.ac.jp
http://rjtsu.meiji.ac.jp/
(会報の題字は久保之俊氏)